総評　2020.12 月分　杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。
「おはようの代わりに／屋根に積もる雪／電柱の途切れ目で溶ける」（宇井麻千）（大阪府）
「途切れ」という欠けが生みだす親和性に目をつけ、〝わたし〟へとなだれこむものを掴んでいる。
「きぬさやの／筋取りながら思い出す／床板きしむ／水屋の光景」（儀間ゆみ）（沖縄県）
床板のきしみ、水の音…。たとえ経験していなくても、なつかしさを覚える光景。このような〝経験を超えた経験〟はポエジーと密接な関係にある。
「土鍋で飯を炊く／吹き零れる瞬間を待ち／白から透明になりゆく／米とわたし」（春町美月）（大阪府）
「米」と「わたし」を同化させていく素直でしずかなこころが貴重。これからの詩作のために、生きるために、大事にしていってほしい。
「マスクして耳あることを思い出す」（長谷川柊香）（宮城県）
マスク生活によって得た、身体性への一つの気づき。人間もまた動物であることを思い出させ、ひとを謙虚な気持ちにさせる。
それでは、来月もお待ちしています。